



#06

クール・クール・ビューティー

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

◆美紅SIDE

しゅつしゅつと音を立ててストーブの上のヤカンから、規則正しく蒸気が噴き出している。冬の乾いた部屋にはちょうど良い加湿、そして暖房だ。

あたしは今、絵を描いている。

静物の油絵だ。

リングとバナナと、そしてなぜかきゅうり。

取り合わせはおかしいけれど、赤、黄、緑と配色のバランスは良い。

何の変哲もないこうした果物が、毎日表情を変えていることを知ったのは、この西陵女子高校の美術部に入ってからだ。

絵を描くのは楽しい。

いつまでも線を引いていたい。

いつまでも色を重ねていたい。

彼らの表情をすべてキャンパスに定着させたい。

絵を描くのはとても楽しい。

でも。

そこであたしの筆は止まる。

そしてそつと横目で葵先輩の様子を窺う。

あたしの隣で黙々と筆を動かす先輩はいつもの鋭い眼光で対象を見据えている。

まるで相手の細胞のひとつひとつ、DNAのひとつひとつさえも見逃さないというくらいに。その真剣な表情は他を寄せ付けない何か荘厳なものを伴っていて、あたしは軽く身震いする。

真剣な先輩は素敵だけど、ちよつと……うん、正直言つてかなり怖い。何かあたしがほんの少し……ほんの少し粗相をしただけで、先輩の絵も、先輩自身も壊れてしまいそうな、そんな危ういバランスの上に、緻密さと脆さを併せ持った完全さがあるような気がしたから……。

そしてその先輩とあたしは今、どうしたわけか、たった二人つきりで黙々と絵を描いているの！

久美子は今日、風邪で休んでいるからいないのは当然としても、りっちゃんとまる子ちゃん

もいないのはどうして？

山崎先輩も、遠藤先輩も、お昼に学食で普通に見かけたのに……。

どうしよう。

どうしよう。

葵先輩を見るたびに動悸がして筆が震える。これじゃまるで蛇へびに睨にらまれたカエルのよう。

このままじゃ……。

このままじゃ……。

ああん、もう誰でもいいから早く来てー！

◆葵あおい SIDE

判ってる。

わたしは今すごい怖い顔をして絵を描いている。

判ってる。

判ってる、けど。

どうしようもないのよおとおお！

だ、だつて憧あこがれの美紅ちゃんがすぐ隣にいるんだよ！?

二人つきりなんだよ!!

緊張しちゃうんだもん！

緊張するとすぐ顔に出ちゃうんだもん、わたし！ 自分じゃどうしようもないんだもおとおおん！

4月に入部してきたときからずっと気になってたんだよ、美紅ちゃん。

くりくりした愛らしい瞳ひとみ、透き通るような白い肌。アクセサリーみたいな耳、ちよつと小さいけれどすつと通った鼻梁びりょう、ほんのりと桜色さくらいろに染まった唇くちびる。そして腰までとどく艶つややかな

黒髪……全部わたしの理想なんだもん！ ほんとに理想が全部具現化されて目の前にあるんだもん！

これで緊張するなっていう方が無理だよおおおお！

……どうしよう。美紅ちゃん、絶対怖がってるよね？

何か言ってる場を和ませたほうがいいよね？

このまんまじゃわたし、ただの無愛想で怖いだけの女だもんね？

でも。

でも。

何にも思い浮かばないのよおおお！

天気の話なんて平凡だし、なにより「そうですね、ずっと雪ですね」の一言で会話が終わっちゃいそうだし……。そうだ！美紅ちゃんの話の話をすればいいんじゃない？美紅ちゃんの話、趣味……。そうだ、美紅ちゃん油絵が好きだって言ってたじゃない！じゃあ、その話をすればって今油絵描いてるじゃないのよおおお！これじゃまるでカレーを食べながらカレーの話をしているようなもんじゃない!? って全然違う？ っていうか別に問題ないんじゃない？ あれ？ あたらしいま何を考えてたんだっけ？ インド人もびっくり？ じゃなかった、

インド人を右へ？ でもなかった！ もお、自分でも何考えてるか判らないわあああ！

いやあああー、もう山崎でも遠藤でもいいから早く誰か来てえええええ！ 助けてええええ！

◆美紅SIDE

どうしよう。

どうしよう。

なんか葵先輩、小刻みに震えてるんだけど……？

気がつかないうちにあたし、何かしっちゃったのかしら？

どうしよう。

どうしよう。

II
このまま黙ってるのも気詰まりだし、かといって葵先輩と挨拶以外で話なんてしたことない

もの……。

◆美紅SIDE

「はちみつ！」

「はちみつ？」

真剣な表情で応えてくれた葵先輩の言葉は、しかしあたしの理解の範疇を超えたものだった。
はちみつ？

はちみつって……あの甘い？ ホットケーキにかける？ 何かの謎かけかしら？

葵先輩、すごい真剣な表情でこつちを見てるんだけど？？

もしかしてはちみつにまつわる名画とかの話かしら？ はちみつの名画、はちみつの名

画……ああん、だめ、全然思い浮かばない！ こんな時、自分の知識の浅さに本当に愕然とするわ……。

でもどうしよう。

このまま何も応えないと、すごい気まずいし……。

何か気の利いた応え……。

何か気の利いた応え……。

ああん、神様！

その時、葵先輩が静かに言葉を接いだ。

◆葵SIDE

「そう、きゅうりにはちみつをかけるとメロン味になるのよ。だからメロンなのよ！」

……我ながら支離滅裂だわ……。

目の前で美紅ちゃんがぼかーんとした表情でわたしを見つめている。

そりゃそうだわ、あたしだって同じこと言われたらぼかーんとするわ、呆然とするわ……。

「だから美紅ちゃんもはちみつを描くといいよ！」

だ、黙れ、あたしの口！ これ以上傷を広げないで！ やめて！ あたしのライフはもうぜ

ロよ！

恥はずかしい！

穴がなかったら掘りたい！ 掘ってでも入りたい！

もうやだ！

もうやだよううううー！

◆美紅SIDE

……やっぱり葵先輩ってすごい。

あたしは改めて先輩の偉い大けいさに、畏敬いけいの念ねんを強くくする。

見ていないようで、先輩、ずっとあたしのこと見ててくれたんだ……！

そう、あたし、静物じやうぶつはだ**いぶ**描けるようになってきたんだけど、流りゅう体たい……特に液体りやうたいってま
だどう描けばいいの**か**全然判わかってない。この前も一日かけて近くの川で写生しやうしやしてみたんだけど、
清らかに流れる水みづの躍動感やくどうかんが少しも表現ひょうげんできなかつた。悔くひしかった。

でも、はちみつなら！

半液体状はんりやうたいじやうで水みづみたいにすぐに形かたちが変わらないから、その分ぶんゆっくり観察くわんさつできる……！

まずははちみつから始めてみなさい、ってことなんですわね、先輩……！

先輩って、やっぱりすごいです！

◆葵SIDE

……なんだろう、美紅ちゃんみこうちゃんがすごいキラキラした瞳ひとみでわたしを見ているんだけど……？

「葵先輩、ありがとうございます！」

「え？ ……あ、ううん、それほどでもないわ」

「あたし、はちみつ描かきます！」

「うん、はちみつ描……ええっ!？」

今の流れでどうしてそういうことになったんだろう？ どう考えても「『はちみつ』ってな
んですか？ 葵先輩、熱でもあるんじゃないですか？ 大丈夫ですか？」の流れでしょう、今
のは!?

ああ、もうだめ。判んない。

美紅ちゃんが何を考えてるかも、自分が何を考えてるかも。

何か知恵熱を通り越して、目眩めまいがしてきたわ……。

あ……。

◆美紅SIDE

突然ぐらりと傾いた先輩を、あたしはあわてて抱きとめる。

何!? 何が起こったの!?

あたしの腕の中にいる葵先輩は思ったよりも華奢きゃしゃで、まるで日本人形のように肌が白くきめ
細かい。

潤うるんだ瞳と、かすかに漏れる吐息に、鼓動こどうがシンクロする。まるで世界に葵先輩とあたしし
か存在しないかのように。とくん、とくん、と……。

あ、先輩、すごい熱い……。先輩もしかしてすごい熱出してるとんじゃ……。

無意識のうちにあたしは自分の額ひたいを、葵先輩のそれに重ねていた。じんわりと熱を帯びた
肌が、微すこかに震えている。葵先輩は瞳を閉じている。そしてあたしも静かに瞳を閉じて、そっ
と……。

「はいはいはい、それ以上やったら犯罪だよーすとっぷーすとっぷーとっぷー」

突然部屋のドアががらりとあいて、山崎先輩と遠藤先輩が楽しそうに笑いながら入ってきた。

「やややや山崎先輩!？」

「いやー、面白いもんが観れたわねー、美智子?」

「そっちなー。こんなにテンパった葵見たのは小学校以来だなー」

「あ、あの、いつから観てたんですか!？」

「いつからって……最初から?」

「葵とあんたが二人でじーっと絵を描いてるからさ、絶対なんかあると思ってそこで観てただw」

「いやー、予想以上に面白かったな」

「うん、葵の涙なんて久しぶりに見たよ」

いつの間にか目を見開いた葵先輩が真っ赤な顔で山崎先輩と遠藤先輩を睨んでいる。

「いやーテンパってたね、葵」

「ほんとテンパってたねー、葵」

「『さみもはちみつを描くといよいよ(ヤ)』」

「あーはっはっはっは、くくくく……」

葵先輩の物真似をする遠藤先輩を見て、山崎先輩がばんばんとイーゼルを叩いて笑い転げている。

「お、お前ら……」

「お?」

「葵ちゃん、もしかして怒った? だめだよ、クールビューティはいつも沈着冷静でい・な・

く・ちゃ・ね★」

「こーろーす!!」

「きゃー、こわーい♪」

「逃げるー♪」

きゃらきゃらと黄色い笑い声を残して山崎先輩と遠藤先輩が廊下へ飛び出していく。それを猛スピードで追いかける葵先輩。

テンパってたって……? :

もしかして葵先輩、あたしのこと……? :

ううん、そんなことないよね。

でもなんだかちよっぴり嬉しいのは気のせいかな? :

中庭には遠藤先輩と山崎先輩に物凄い勢いで雪玉を投げている葵先輩の姿が見えた。なんだか楽しそうだからあたしも参加してよさうかな♪